

第2分科会 「吃音のある子供の指導・支援から

子供が自分らしく暮らしていくための取組を考える」

「吃音を生きるということ～子どもたちのレジリエンス～」

千葉市立花見川第三小学校 教諭 黒田 明志

I はじめに

大学生の時に初めて、自分がどもることを意識した。アルバイト先のコンビニのレジで、急に「ありがとうございます」が言えなくなった。他にも「おはようございます」や「お疲れ様です」「お先に失礼します」が言いにくい。これは何だろうと不安に感じつつも、バイトを含め何とか大学生活を過ごしている中では、それほど深く悩むことはなかった。そんな私がことばの教室の担当になり、そこでようやく自分のこの言いにくさが「吃音」「どもり」だと知った。

ことばの教室でどもる子どもと出会った私は、子どもたちとどもりについて語り合うことが大切だと、先輩の先生の実践を見たり、『吃音ワークブック』（解放出版社）などを読んだりして、頭では理解していた。しかし、自分の吃音とどう向き合えばよいか分からなかった私は、実際にどもる子どもを目の前にしても「自分を語ることば」がなく、どもりとは関係のない話を延々と続けるばかりであった。

そんな時、日本吃音臨床研究会主催の「吃音親子サマーキャンプ」に参加することになった。2泊3日のキャンプは、吃音についての話し合いと、自分の体験を書く作文教室、声やことばに向き合うための劇の練習と上演が主な内容だった。ゲームやケータイは使用禁止で、所謂遊びの要素はほとんどないにもかかわらず、子どもたちは「楽しかった、またキャンプに参加したい」と言う。それはどもる仲間と出会い、吃音と向き合い、語り合うことを子どもたちが求めているからだろう。自分を語り、他者の語りに耳を傾け、自己をふり返ることで、子どもたちは自ずと変わっていく。

どもりながらもいきいきと生きる子どもや大人と出会い、「どもりは治さなくて、平気なんだ」「どもっても大丈夫なんだ」と、自分自身のどもりについて考えるようになった私は、ようやく子どもたちとどもりについて話し始めた。ただ「どもっていい」と話しながら、これまで無意識とはいえどもりを隠し、そして子どもたちの前で今どもりを隠せる自分に対して違和感を覚え、それが子どもとの距離を生んでいった。

私の不安を見抜いたかのように、どもりの話を進めても子どもたちは自分の思いを語らなくなった。「大丈夫」「心配なことはない」と彼らから言われる私は、やがて、子どもと向き合えない自分が教師を続けることに疑問を抱くようになった。そのことを誰にも言えずひとり悩んでいたとき、北海道・浦河で統合失調症の人たちと当事者研究を進めている「べてるの家」の向谷地生良さんのワークショップに参加することになった。そして、私のこの問題を「当事者研究」する機会を得た。

参加者から質問を受け、語り、研究を進めていく中で、吃音を否定しているわけではないのに「どもれない」ことが私の課題だと気付いた。それは、吃音を隠すというよりは自然に言葉を言い換え、どもらない話し方を身に付け、吃音に向き合うことなく今までやり過ごしてきた結果であった。さらに、子どもとなかなか向き合えずに悩んでいた私に実は「悩む力」があり、それが子どもと向き合うために必要なことだと気付くことができた。ことばの教室の担当者として子どもと対等の立場で、子どもの語りに耳を傾け、自分を語り、子どもの持っているネガ

ティヴな吃音の物語を肯定的なものにしていく。それが、私が目指すどもる子どもに向き合う姿勢となった。

II レジリエンス

「回復力、逆境を生き抜く力」を表す「レジリエンス」は、心理学や精神医学の分野で使われ始めたが、最近は教育現場でも聞かれるようになってきた。吃音親子サマーキャンプに参加した不登校の6年生の女子は、どもりについての話し合いを経験し、「みんながんばっているのに、私は前向きに考えていなかった」と作文に書き、学校に行き始めた。吃音をからかわれて悩んでいた子が「どもりをからかわないで」と全校児童に伝え、自分のことを知ってもらったと話す。このような、強いというより「しなやかな心を育てる」がレジリエンスであり、子どもが吃音について語り合うことでつけていく、生きる力といえる。

最近、発達障害者支援法で就職活動をするなど、吃音の悩みを理解してほしいと願う人たちの記事を目にするようになった。吃音のネガティブな物語から抜けられず、吃音を治す、軽減するにこだわると、どもる自分を否定し、より一層悩みを深めかねない。その一方で、キャンプに参加している子どもや、その子を支えるスタッフのどもる人たちは、吃音と向き合い、吃音について仲間と語り合い、学んできたことで、いろいろと悩みながらも吃音と上手に付き合っている。

その差は、困難な状況の中でもしなやかに生き延びる力、すなわちレジリエンスが育っているかどうかだろう。吃音は治す方法も、吃音の症状を軽減させる言語訓練法も見つかっていない。吃音をネガティブなものとして捉えていると、仮に子どもの頃は無難に過ごせたとしても、思春期、青年期になって吃音が大きな課題として立ちはだかることもあり得る。社会の吃音に対する理解が自分の思い通りにならなくても、その困難な状況の中で何とか生き延びる力を学童期のことばの教室で育てておきたい。それが、レジリエンスを育てるということではないだろうか。

レジリエンス研究のウォーレンらはレジリエンスの構成要素として、洞察・独立性・関係性・イニシアティブ・ユーモア・創造性・モラルの7つを挙げている。7つの項目の全てを持つことは難しいが、その中の1つでも、2つでも、ことばの教室で育てることができれば、将来吃音に悩むことがあっても、自分の力で生き延びることができるのではないか。これまでことばの教室に関わった3人の子どもについて、レジリエンスの立場から整理してみたい。

III 教室での実践（※いずれも実在する話だが、プライバシー保護の為に仮名を用いている。）

1 自分やどもりと向き合う

直之が小学3年生になった時、吃音をテーマに自分の思ったことや感じたことを読み札や絵札にして表す「どもりカルタ」を作るようになった。彼はカルタ作りに意欲的であったが、出来上がった読み札の中には「スムーズに ことばが出ない ゆるしてね」「先生と話すときたまにどもる はずかしい」など、少し気になるものがあった。

そこで、この2つの読み札をもとに話し合った。すると「自分がどもった時に、友だちや先生から何か言われたことは特になし、それほど目立つどもり方でもないから、多分気付かれない。けれども、ひょっとしたら心の奥では変だと思っているかもしれない。それに、自分がたくさんどもったらそうなるかもしれないと不安になる」と考えていることが分かった。「じゃあ、どもりを隠したい？」と尋ねると、「クラスの友だちもサッカーの仲間も、どもることを知っているから大丈夫」と話し、すぐに「クラスでどもっちゃうけど みんな知ってる 大丈夫」「サッカーで『へい』と言う時どもっても 仲間だから大丈夫」という読み札を作った。

レジリエンスの要素の中でことばの教室ができる最も大切なものは、吃音について語り合い、その中で育つ「洞察」する力だと思われる。直之も自分が作ったカルタをもとに話し合う中で、

彼の洞察を進め、それを「創造性」や「ユーモア」を持って表現している。今まで作ったカルタの中で一番のお気に入りには、「携帯電話 メールもいいけど 電話で話したい」だと彼は言う。

2 自分やどもりを語る

3年生になった陽斗は、友だちに真似されたことで「どもりを治したい」と言い始めた。彼は自分のどもりのことや真似されて嫌だと思ったことを手紙に書き、それを担任の先生にも協力してもらい、少しずつ周りの友だちに伝え始めた。それを繰り返す中で、また、私がサマーキャンプでの経験や、そこで出会った子どもたちの話をする中で「どもっても大丈夫」と彼自身が言えるようになっていった。これは、周りの人に自分をどう理解してもらい、関わっていくかというレジリエンスの構成要素の「関係性」へのアプローチである。

ところが、4年生で担任が替わると、徐々にクラスが荒れ出し、再び陽斗のどもりを真似する子どもたちが出てきた。そのため、家に帰ってくるとイライラした様子を見せたり、朝、登校を渋ったりする様子も見られ始めた。しかし、私がそのことについて尋ねると、彼は「大丈夫。悩んでない」の一点張りで、その様子には私は困惑していた。そしてちょうどそれと同じ頃に、私は「当事者研究」のワークショップに参加し、そこで自分の悩みについて語る「ことば」をようやく手に入れる経験をしていた。

そんな私が陽斗にしたことは、彼の悩みを聞き出そうとするのではなく、私の不安や悩みについての話を彼にすることだった。それはどもれなくて悩んでいたことであり、教師として自信がなくなっている話であった。同時に、それらの悩みは、どもりと向き合おう、子どもたちと向き合おうとしているからこそ出てくる悩みであり、その瞬間を一所懸命に生きているから悩むのだという話にもなった。その時の陽斗は何か特別な言葉を返してくれたわけでもなく、また自分のことを話し始めたわけでもない。ただ、私自身もそうであったように、人が悩むことについて、陽斗も肯定的に受け止め始めていたように感じた。

6年生になった彼に思い切って当時のことを尋ねてみた。すると、「あの頃は問題が大きすぎて言えなかったのかもしれない」「4年生になって先生が替わった。だんだんクラスが落ち着かなくなって、またどもりを真似された。だけど、それは自分がどもるせいじゃなくて、きっとクラスが荒れていたからだと思った」と客観的に当時の自分やまわりの様子を語り始めた。陽斗は、3年生の時には自分で解決しようとしたが、今回は問題に対して自分から距離をとり、特に何もしないという選択をした。どもりを何とか治そうとすることもせず、どもりのことを分かってもらおうとするのでもない。「これは相手の問題である」と対処の仕方を自分なりに工夫したわけで、そこにはレジリエンスの構成要素の中の「洞察」「独立性」が発揮されている。

この時だけでなく、陽斗はどもりや、それ以外の自分の悩みに対して、自分自身で解決方法を模索し、グループ学習の仲間や身の周りの人との語りを通し、何とか自分の力で乗り越えてきた。つまり、それは今まで知らず知らずのうちに「当事者研究」をしてきたということになる。

3 吃音とともに生きる

6年生の夏休み、本人の言葉からはそれほど吃音に悩んでいる様子は見られなかったが、母親が以前から聡の吃音を気にし、中学への進学が不安であると相談にきた。そして、学校の授業を抜けずに放課後でも通えと伝えと、聡も通いたいと言い、週に1回の通級が開始した。

そんな彼が、年末になり「球技大会でこの学校に来ることになったが、ことばの教室に通っていることは黙っていてほしい」と言ってきた。「友だちにどもりがばれるのが嫌だ」がその理由だ。その3ヶ月後に、聡は小学校を卒業した。その後も聡からは毎年欠かさず年賀状が届

いた。中学校では野球部に入り、友だちとも仲良く過ごしている様子で私も安心していた。

ところが、中学3年生の秋、聡の母親から電話があった。どもりが理由で学校に行きたくないという母親の前で泣きながら訴えてきたのだ。私はすぐにことばの教室に来るように母親に伝えた。数日後の放課後、聡はことばの教室に現れた。「どうした。何か困ったことがあった？」と聞くと、高校受験の模擬面接の練習に行きたくないと言う。今までは上手くどもりを隠し通せたが、面接の練習が始まれば友だちに自分のどもりが知られるかもしれない。それが不安で、学校に行きたくないと思うようになったのだ。彼は友だちにどもりを知られるのが嫌なのだ。また、これまで友だちに隠してきたことに後ろめたさを感じるのだと言う。一方で「受験の当日はどもっても仕方ない」と話していたので、練習がどうしても嫌なら休むのも選択肢だと話した。そして、高校の面接は入学したい熱い思いを伝える場であり、どもるかどうかは関係ないので、しっかり勉強をしてほしいと話した。

スポーツが盛んな高校に入学したい気持ちが強かった聡は、ついにどもることを覚悟し、面接を受けることにした。第1志望校は不合格だったが、第2志望校に合格した。そして年度末のことばの教室のグループ学習で、中学校生活や高校受験の面接のことを子どもたちに話してくれた。先輩として子どもたちに優しく自分のことを語りかける聡の姿を見て、彼の成長を感じた。

実際にことばの教室に通っていたのは半年間だけだったが、いろんな話をたくさんして、その後も私と関係性を続けてきたのは彼のレジリエンスだ。困ったとき人に助けを求めることのできる「関係性」が、彼を再び私のところへ来させたのだ。そして、好きなスポーツをしたいという人生の目的が、「イニシアティヴ」「モラル」というレジリエンスにつながり、面接でどもる覚悟をさせたのだろう。彼が友だちに自分のどもりを隠し通したことは彼の弱さであり、悩み続けた強さでもある。そして、悩みながらも最後は自分の力で乗り越えたことは、今後の人生を生きる上で大きな財産になるだろう。将来の夢について、聡から「大学に入って、ことばの教室の教師になりたい。どもる自分だからこそできることがある」と聞いた。

IV おわりに

「どもりは劣った、恥ずかしいもの」という、身近な環境や社会から影響を受けたドミナントストーリー（支配的な物語）を、「どもっても大丈夫」と自分にとって生きやすいオルタナティブ・ストーリー（別の物語）に変えていくのがナラティブ・アプローチである。そして、物語を変えるには信頼して語り合える人が必要とされる。だとすれば、ことばの教室の担当である私はその中の一人になりたいと思う。また、自分の困っていることを自分で研究するという「当事者研究」で、問題への対処には複数の選択肢が常にあることを学んだ子どもたちは、将来のより困難な状況にあっても、対処していけるだろう。それらの取り組みを通して、レジリエンスの7つの要素の中で子どもに何が育ったのかを検討することが、ことばの教室修了へのひとつの基準になると私は考えている。

<参考文献>

- ・『サバイバーと心の回復力 逆境を乗り越えるための7つのレジリエンス』金剛出版 スティーブ・J・ウォーリン、シビル・ウォーリン著 奥野光、小森康永訳 2002 (1993)
- ・『吃音とともに豊かに生きる』NPO法人・全国ことばを育む会 伊藤伸二著 2013
- ・『吃音ワークブック どもる子どもの生きぬく力が育つ』解放出版社 伊藤伸二、吃音を生きる子どもに同行する教師の会編著 2010
- ・『吃音の当事者研究 どもる人たちが、べてるの家と出会った』金子書房 向谷地生良、伊藤伸二著 2013
- ・「どもる子どものレジリエンスを育てるー親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会ー」吃音を生きる子どもに同行する教師・言語聴覚士の会主催 (HP : <http://www.kituonkosyukai.com/>)